



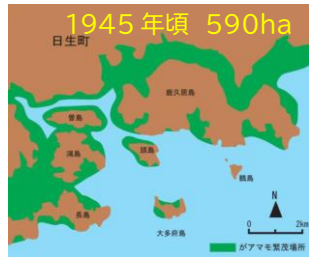
## 日生地区について

日生地区は、岡山県の南東部、兵庫県との県境に位置し、本土と大小約13の島からなる日生諸島で構成されている。古くから「日生千軒漁師町」と呼ばれる漁業の盛んな地域であり、壺網（小型定置網）や小型底曳網、流瀬網（刺網）、カキ養殖、ノリ養殖などの漁業が営まれている。中でもカキ養殖業は岡山県下で最大であり、全国的にも有名な「日生かき」の産地となっている。



## アマモ場保全活動の背景

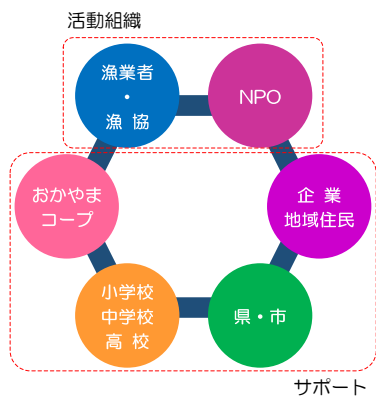
かつて、当地区には大規模なアマモ場が広がっており、一時期にはアマモが航行の妨げになって邪魔者扱いされることもあった。しかし、1985年、沿岸部を中心に漁業を営む壺網の漁業者が漁獲不振の原因を考えたところ、繁茂していたアマモが海岸から姿を消していることに気が付いた。1945年頃に590haあったアマモ場は、12haにまで減少していた。岡山県が調べたところ、日生諸島最大である鹿久居島の周辺が過去にアマモの大繁茂地であったが、当時、鹿久居島周辺のアマモは減少し、沖合の大多府島にわずかながらアマモが自生していることが確認された。そこで、県の指導を受けながら、壺網漁業者を中心に漁協青年部員も参加して、アマモ場保全活動の1歩を踏み出した。



## 活動方針および組織の構成

活動の基本方針は、アマモの種を効果的に確保し、その播種により藻場の回復を図ることである。壺網漁業者の減少に伴い、2009年より「日生藻場造成推進協議会」を設立し、漁業者とその後継者を中心に現在まで活動を続けている。

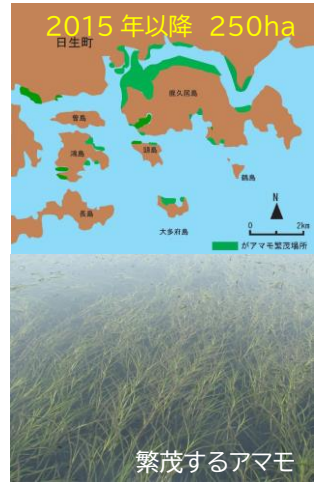
組織の体制は、漁業者を主体に、漁協、NPO法人から構成しており、県や市、おかやまコープ、地元の小中学校などを中心に、多様なグループのサポートを受けながら活動を進めている。



アマモ場の保全活動	
①	花枝の採取 5月下旬～6月上旬にアマモの花枝（流れ藻）を採取。
②	花枝の保管 花枝を袋に詰めて、播種時期まで保管袋に吊るしておく。
③	種子の選別と播種 9月下旬～10月上旬に袋を引き上げ、比重選別を行った種子を活動海域へ播種する。

## アマモ場の回復「継続は力なり」

活動当初は「お金にもならないのに何になるのか」と他の漁業者から非難されることもあったが、毎年コツコツと活動を続けてきたところ、徐々に成果が見え始めてきた。特に、底質改良材としてカキ殻を利用したところ、2008年頃より効果が現れてきて、活動開始から30年が経過する2015年には、日生町地先のアマモ場は250haまで回復した。現在も、多少の増減はあるものの、同程度でアマモ場を維持し続けている。



## 続ければ仲間が増える

2012年からは、漁協や県などと「アマモ造成活動に係る協定」を結んだ『おかやまコープ』が、2013年からは、以前からカキ養殖体験を行っていた『日生中学校』が活動に参加するようになった。花枝の採取から播種まで、一連の作業を連携して行っており、アマモ場保全活動の理解増進につながっている。

また、2016年には「全国アマモサミット 2016in 備前」を開催し、約2,000名の人々が全国から集まった。これを機に活動の輪がさらに広がり、地元の小学校や高校、企業などが活動に参加するようになった。最近では、県外にまで当組織の活動が周知されるようになり、京都府にある南宇治中学校が、修学旅行を兼ねてアマモ場保全活動に参加するようになった。



## 活動の成果と今後の方針

アマモ場保全活動を38年続けてきた結果、かつて12haまで衰退した藻場を250haまで回復させることができた。また、長年の取組により、おかやまコープや日生中学校をはじめとする多くの団体や学生が活動に賛同し参加してくれるようになったことは、大きな成果の一つとなった。

アマモ場を再生することを目的に始まった活動だが、参加人数が増えた現在、人の手を加えることで多様な生態系が維持される「里海」の大切さを伝えることも目的の一つとなっている。今後もアマモ場保全活動を継続するとともに、里海の考えを次世代へつなげていきたい。

